様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：２４６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１２１００

研究課題名（和文）自閉スペクトラム症児の母親がもつ「まもり」の検証と支援方法の構築

研究課題名（英文）Development of a support method focusing on the protective nature of the mothers of children with Autism Spectrum Disorders

研究代表者
川上　あずさ（Kawakami, Azusa）

奈良県立医科大学・医学部・教授

研究者番号：００４３４９６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：２歳から12歳のASD児を持つ母親を対象とし児のASDの特性、家族構成等の基本属性と母親のレジリエンスや家族の凝集性等の質問紙調査、半構造化面接調査を実施した。
質問紙調査と面接調査の結果を統合し、母親がもつ「まもり」の機能的側面である家族マネジメントに注目した。結果、ASD児の特性を活かし、主体的に対処している母親は自己達成可能感や問題解決能力が高い傾向にあり、考えや行動も積極的な母親が多い可能性が示唆された。母親がもつ「まもり」や対処方法の基盤となっているものを把握すること、母親の自己評価が前向きになるような支援が必要であるという示唆が得られた。育児相談、講演会等で研究成果を母親に還元する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ASD児の母親の障害受容やストレスに関する研究は散見されるが、母親がもつ「まもり」に注目した研究は見当たらない。本研究は、先行研究により明らかにしたASD児のきょうだいがもつ「まもり」を基盤として、母親の「まもり」を検証した。さらに、まもりながらの生活・育児における母親の心理的側面をレジリエンスに注目しその状況を明らかにできた。そのことを考慮し、支援の方向性の示唆がえられたことに意義がある。

研究成果の概要（英文）：Targeting mothers of ASD children aged 2 to 12 years, we conducted a questionnaire survey and basic structured attributes such as ASD characteristics, family structure, mother resilience and cohesion of the family(FACESⅢ), and a semi-structured interview survey.
By integrating the results of the questionnaire survey and the semi-structured interview survey, we focused on the family management, which is the functional aspect of the mother's “protection”. As a result, it was suggested that the mothers who take advantage of the characteristics of ASD children tend to have high self-fulfillment feelings and problem-solving abilities, and that many mothers are positive in their thoughts and actions.
The results suggest that it is necessary to understand the “protection” of mothers and what is the basis of coping methods, and to support the mothers so that their self-evaluation is positive. The results of research are returned to mothers through childcare consultations and lectures.

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：自閉スペクトラム症児　母親　まもり

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2013 年度文部科学省の調査によると、小・中学校の特別支援学級に在籍している自閉症・情緒障害の児童生徒数は、約 6.7 万人と報告され、特別支援学級の児童生徒総数の約 41%をしめていた。少子化の中増加傾向にあり、この子どもの養育に困難を抱えている親が多いと考えられた。ASD 児の母親が体験している困難は、家事、療育などで余裕のない日常や手探りの子育て、子どもの将来への心配等の報告もあった。ASD 児の日々の養育、家族の生活を支える母親には、日常生活に密着した困難や不安が存在し、これらの困難や心配・不安は、母親の養育能力を低下させると考えられる。

先行研究において、申請者は、ASD 児と共に生活し、成長発達するきょうだいへの支援が必須と考え、自閉性障害児のきょうだいがもつ「まもり」に着眼した支援方法の構築（平成 24 年度基盤 C）として研究を進め実践している。きょうだいは、ASD の同胞がもつ固有の世界の理解しづらさから関係構築に困難を体験するが、つかず離れずの距離感を体得することで巻き込まれることを防ぎ自身をまもる。また、同胞や親を思いやり、同胞の世話や家事を手伝うことで家族の生活をまもり、さらには、他者から同胞をまもるために、説明、謝罪、追い払い、衝突などを行う。このように、「まもり」は、大切に思い、護る・守る・保ることであり、日々営む生活に関連する安全性、家族成員の存在・尊重に関連する安心感を確保するものである。また、この研究において、きょうだいがもつ「まもり」は家族機能、家族の情緒的つながりのなかで学習したものであり、母親を中心とする養育者に大きく影響を受けていることも明らかとなった。このことから、ASD 児をもつ家族の生活には「まもり」の概念が存在し、母親がもつ「まもり」を検証することが母親が体験している養育上の困難、余裕のない日常を改善する打開策の検討に繋がると考えた。

２．研究の目的

１）ASD 児の母親がもつ「まもり」の特性として考えられる、心理的距離、方法、状況による変化（強化）を、ASD 児の特性、発達段階、家族背景等の関連性を考慮し検証する。

２）「まもり」の検証結果を基盤として、母親に対する支援方法のモデルを作成し支援方法を構築する。

３．研究の方法

１）ASD 児の母親がもつ「まもり」の検証

（1）研究方法：質問紙調査と、半構造化面接調査のミックス法

①質問紙調査には、ASD 児の特性・発達の評価、家族の状況を把握する基本属性と、「凝集性」、S-H 式レジリエンス検査を使用する。

「凝集性」の評価については、オルソン（1985 他）の家族機能測定尺度 FACESⅢに含まれる凝集性の因子 10 項目５件法（草田・岡堂 1993）を使用する。

S-H 式レジリエンス検査は、自己効力感、ソーシャルサポート、社会性の３因子合計 27 項目で構成され、信頼性・妥当性が検証されている。レジリエンスは、ストレスに対して柔軟に対応できる特性といわれ、この検査によって、母親の心理的状況の把握、支援モデル作成で使用する社会認知理論のなかの自己効力感の把握ができる。

②面接調査では、子どもとの心理的距離、特性をもつ子どもへの養育方法、困難等の状況による変化（強化）の視点で、生活の様子や体験、思いなどを聴き質的に明らかにする。

（2）研究対象者

①日常生活において、子どもの特性への対応と基本的生活習慣獲得への支援が多くなる幼児期後期から学童期（3～12 歳）の ASD 児をもつ母親とする。

②面接調査においては ASD 児の特性、発達の評価、発達段階は偏らないよう考慮した。

③対象者数は、質問紙調査 120 名、そのうち 20 名への面接調査を目標とした。

４．研究成果

①質問紙調査

データ収集期間　平成 28 年 12 月～平成 30 年 3 月

研究対象者：104 名

対象者の属性

母親の年代					家族構成			ASD 児の年齢			
20 代	30 代	40 代	50 代	不明	核家族	拡大家族	不明	３歳以下	3～６歳	７～12 歳	不明
10	60	33	1	1	87	15	2	34	67	2	1

S-H 式レジリエンス検査結果

対人関係			自己達成可能感			協調性や問題解決能力			総合		
高い	普通	低い	高い	普通	低い	高い	普通	低い	高い	普通	低い
24	40	40	24	53	27	14	47	43	22	45	37

幼児期の ASD 児の特性である、言葉の遅れやコミュニケーション障害、行動の落ち着きのなさ、友達関係の築き方と母親のレジリエンスの項目について相関をみたところ、優位な相関関係は確認できなかった。

家族機能を評価する質問紙、凝集性について分析を継続中。

②面接調査

データ収集期間　平成 28 年 12 月～平成 30 年 3 月

対象者の属性

	年齢（歳代）	母親以外の家族	ASD 児の特性
a	30	母　６歳女児	言葉の遅れ 落ち着きがない
b	40	夫　乳児男児 4 歳男児	言葉の遅れ　多動
c	30	夫　父　母　５歳男児 小学生女児	言いたいことだけを言う
d	30	夫　義父　義母　幼児 双子女児　４歳男児	言葉の遅れ 欲求がある時だけ友達と関わる
e	40	夫　幼児男児　12 歳男児　中学生女児 高校生男児	会話が続かない 欲求がある時だけ友達と関わる
f	30	夫　３歳男児	言葉の遅れ 欲求がある時だけ友達と関わる
g	30	夫　5 歳男児 小学生女児	言いたいことだけを言う 欲求がある時だけ友達と関わる
h	40	夫　６歳男児	会話が続かない　多動 他の子どもに興味がない
i	30	夫　３歳男児　小学生女児 2 人　中学生男児	会話が続かない 落ち着きがない 欲求がある時だけ友達と関わる
j	30	夫　６歳男児	会話が続かない　落ち着きがない 欲求がある時だけ友達と関わる

母親のもつ「まもり」の方法（帰納的側面）を明らかにすることを目的として、母親の家族マネジメントに注目し、半構造化面接調査を実施した。

面接内容は、家族の状況、日々の生活の様子や役割、困難等の状況における対応等についてとした。分析は、データの全体を把握し、母親の家族マネジメントに関連した内容をふるい分け意味のまとまりによって切片化しコードとした。さらにコードの類似性によってカテゴリ化した。結

果、協力が得られた母親は、ASD 児を含む 0 歳～18 歳の子どもをもつ 10 名であった。分析の結果、家族の目標に関連して、＜家族で納得した方向性をもつ＞＜子どもの今後への不安＞を抽出した。対処として、ASD 児の養育に関する＜関わり方の方向性、タイミングを見極める＞＜関わり方が分からない＞、きょうだい及び養育全般に関する＜こなしながらやっていく＞＜子どもそれぞれに合わせる＞＜子どもの主体性を活かす＞、また母親自身に関する＜自分の傾向を認識し役目を確信する＞＜理解者を得る＞を抽出した。＜関わり方の方向性、タイミングを見極める＞は、「子どもの力を認める」「療育の方法を学ぶ」等で構成された。また、＜こなしながらやっていく＞は、「いろいろ起こる度に対処する」「細かいことには目をつぶる」等から構成された。＜自分の傾向を認識し役目を確信する＞は、「1 人で抱え込んでしまう」「頑張りすぎる」「子どもに関する決定権をもつ」「パパを主役にする」等から構成された。この研究結果から、ASD 児を養育する家族は、ASD 児の特性を考慮した関わり方に迫られることから、その児、家族なりの納得した方向性をもつことが重要となると考える。この納得と方向性をもつために母親は、ASD 児の養育に関する対処だけでなくきょうだいおよび養育全般に関する対処を行っているが、1 人で抱え込んでしまう、頑張りすぎる母親もいることから家族における母親の役割を考慮し、役割が過重にならないための支援が必要であることが明らかとなった。

③質問紙調査と面接調査の統合による母親の特性の把握

家族マネジメントの状況による母親の対処は、「関わりの方向性、タイミングを見極める」「試行錯誤の関わり」「こなしながらやっていく」「子どもそれぞれに合わせる」「子どもの主体性を活かす」であり、これらから母親の対処の基盤は主体性ではないかと考え、子どもの特性を活かした対処（A 群）と、流れや状況に合わせる対処（B 群）に大別した。これに沿って母親を分けると A 群６名、B 群 4 名となった。結果、「自己達成可能感」等の項目について A 群は、低い～高い範囲の評価であったが、B 群には、高いと評価された者がいなかった。また、内心と行動のバランスの評価については、A 群には、考え方と行動がともに積極的と評価された者が４名いたが、B 群にはいなかった。A 群・B 群双方に考え方・行動がともに消極的な傾向の者はいなかった。この研究から、家族マネジメントにおける母親の対処を、主体性を基盤に大別したが、子どもの特性を活かし対処している母親は、自己達成可能感や問題解決能力が高い傾向にあり、考えや行動も積極的な母親が多い傾向の可能性が示唆された。母親の対処方法の基盤となっているものを把握すること、自己達成可能感や問題解決能力の母親自身の評価が前向きになるような支援が必要ではないかと考えられた。

母親に対する支援方法のモデルを作成し支援方法を構築することを計画していたが、分析に時間を費やし具体的な支援モデルの検討に至らなかった。

支援モデルの検討に際しては、社会認知理論に基づき行動能力（スキルと知識）、結果への期待感（自分の行動が好ましい結果を導くだろうという期待感）、自己効力感の３つの概念が重要と考えていた。面接調査から母親の対処は、「関わりの方向性、タイミングを見極める」「試行錯誤の関わり」「こなしながらやっていく」「子どもそれぞれに合わせる」「子どもの主体性を活かす」という方法が明らかとなった。加えて質問紙調査と面接調査の統合による検討から子どもの特性を活かし対処している母親は、自己達成可能感や問題解決能力が高い傾向にあり、考えや行動も積極的な母親が多い傾向の可能性が示唆された。子どもの特性を活かして対処できるということは、スキルと知識を持ち合わせ行動していると解釈できる。そのような母親は、自己達成可能感や問題解決能力が高い傾向にあることも明らかになった。これらのことから、計画していた

支援モデルの方向性への示唆をえることができたと考える。今後データを蓄積するとともに、母親のスキルと知識による行動能力、結果への期待感、自己効力感に注目し、母親への育児指導や講演会で研究成果を還元し、支援を進めていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 川上あずさ	４．巻 61（２）
２．論文標題 自閉スペクトラム症児ときょうだい	５．発行年 2019年
３．雑誌名 保健の科学	６．最初と最後の頁 91－95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川上あずさ	４．巻 38（7）
２．論文標題 自閉スペクトラム症児のきょうだいへの支援	５．発行年 2019年
３．雑誌名 発達教育	６．最初と最後の頁 4－11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 川上あずさ、渋谷洋子、真野祥子
２．発表標題 自閉スペクトラム症児の母親の家族マネジメント
３．学会等名 日本看護科学学会第38回学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 川上あずさ、渋谷洋子、真野祥子
２．発表標題 自閉スペクトラム症児の母親の家族マネジメント第２報‐母親の精神的健康‐
３．学会等名 日本看護科学学会第39回学術集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	渋谷　洋子 (Shibuya Youko) (20434962)	奈良県立医科大学・医学部・講師 (24601)	
研究分担者	真野　祥子 (Mano shouko) (90347625)	摂南大学・看護学部・准教授 (34428)	